

研究所だより

第465号
2023年12月21日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ 年の始めの 例 (ためし) とて
終 (おわり) なき世の めでたさを
松竹たたいて 門 (かど) ごとに
祝 (いお) う今日こそ 楽しけれ ”



『 一月一日 』 1893年 (明治26年) 日本の唱歌

～ 冬来たりなば、春遠からじ ～

今年も残すところ、あとわずかとなりました。暦の上では、22日は冬至 (1年で一番昼が短く、夜が長くなる)。冬の間点にあたりますが、寒さはこれからが厳しくなり、本格的な冬の到来となります。今週は県内各地で今シーズン一番の冷え込みとなり、広い範囲で最低気温が0度を下回る冬日となりました。県は、新型コロナウイルスの患者数が増加傾向で、インフルエンザも依然として注意報を出す状況が続いているため、年末年始にかけて医療提供体制に負荷がかかる可能性があるとして感染対策を呼びかけています。皆さまも引き続き基本的な感染防止対策に留意しながら年末年始を過ごしましょう。

.....
「指導と評価」10月号より

子どもを真ん中に置いた支援とは — 学校における多職種連携を検討する —

たけだ てつろう
武田 鉄郎
(和歌山大学名誉教授)

はじめに

すべての子どもは、その成長過程において支援を必要としています。「子どもの権利条約」の第3条では、子どもに関係のあることが決められ、行われるときには、こどもにとってもっともよいことは何かを第1に考えなければならないこと、同じく第12条では、子どもは自分に関係のあることについて自由に自分の意思を表す権利があると謳われています。すなわち、子どもはどんな状況であっても、わかりやすい説明を受け、自分で選択したり、必要な支援を主張したり、受けたりして生活することができる権利を持っているということです。

しかし、近年、特に虐待や不登校、障害などの支援ニーズを有する子どもは増加しており、彼らをとりにくく課題は多様化、深刻化しています。これらに対応するためには、教師個人や学校内だけでは限界があり、学校における多職種連携の重要性はますます高まっています。

そこで本稿では、支援ニーズのある子どもを真ん中に置いた学校における多職種連携による支援の在り方について検討することにします。

1 教師個人や学校内の対応だけは限界がある事柄と多職種連携の定義

教師個人や学校内の対応だけでは限界がある事柄について、溝部ら (2018) は小学校教員への質問紙調査を行いました。その結果によると、「虐待」「不登校」「反社会的行為」「帰国・外国人児童への指導」「放課後対策」「暴力行為」「いじめ」「英語指導」「学校事故や学校安全対策」「部活動指導」「障害のある児童への対応」などがあげられました。翌年、同じく中学校教員への調査結果では「虐待」「ネットトラブル」「不登校」「非行」「反社会的行為」「帰国・外国人児童生徒への指導」「いじめ」「障害のある児童生徒への対応」などがあげられました (溝部ら、2019)。これらのうち多くの項目

については、多職種連携が有効であると思われます。

小田 (2021) は、「学校における多職種連携とは、教師個人や学校内での対応に限界がある事柄に対して、立場の異なる多様な視点や経験を持つ、非専門職も含む複数の個人や機関が、諸課題を解決し、より良い子ども支援や教育実践に繋げていくために、それぞれの専門性や経験、視点を生かす試みである。その際、相互の情報や有する専門性を共有し、相互補完的に経験や専門性を生かし包括的に諸課題の解決に取り組むことを連携とする」としています。筆者は、小田の定義をもとに、「子どもを真ん中に置く」ことを常に意識し、多職種との有機的な連携を図ることにより、より質の高い支援の在り方を探究していくことが重要であると考えます。

2 多職種連携を適切に推進するために

中村 (2010) は、チーム・ビルディングモデルを紹介しています。このモデルでは連携の質を高めるためには「目標」「役割」「仕事の進め方」「関わり」の4つの次元をチーム内で明確にし、共有することが重要であるとしています。

まずチーム連携の根幹となるのは「目標」です。チームの目標やビジョンがどれくらい明確であり、メンバー間でどれくらい共有され、当事者意識をどれくらい有しているかがこの次元の課題となります。次の「役割」の次元では、目標を達成するための役割分担、責任や権限の明確化、さらに役割がどれくらい柔軟に他者に相補われているかが課題となります。さらに「仕事の進め方」の次元は、仕事の手順は適切か、その手順の明確化や共有化の程度はどうか、チームはどのようにミーティングを進め意思決定をしているか、などが課題となります。「関わり」の次元は、メンバー間の関わりで生じる価値観の違いなど、対人関係性に関するものです。メンバーが互いに自主・自律性や対等性を確保し、さらに各自の専門性を発揮し、目標が効率・効果的に達成されることに加えて、能力や資源を互いに補完し、相乗効果により新たな成果を生み出すことが期待されます。



3 多職種連携の核となる個別のプランの作成と活用

個別の指導計画は、教育課程を具体化し、障害のある児童など一人一人の指導目標、指導内容及び指導方法を明確にして、指導するために作成するものです。個別の支援計画は、教育、医療、福祉、労働等の関係機関が連携・協力を図り、障害のある児童の生涯にわたる継続的な支援体制を整え、子どもの望ましい成長を促すために障害による困難な状況、支援の内容、生育歴、相談歴など、子どもに関する事項について、本人・保護者も含めた関係者で情報共有するためのツールです。学齢期に作成されるものが個別の教育支援計画です。

小中高等学校の学習指導要領において、「特別支援学級に在籍する児童 (生徒) や通級による指導を受ける児童 (生徒) については、個々の児童 (生徒) の実態を的確に把握し、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用するものとする」と記され、特別支援学校だけでなく、小中高等学校でも個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成が必須となりました。また、不登校、虐待などのケースに対して、2018年に文部科学省から「不登校児童生徒、障害のある児童生徒及び日本語指導が必要な外国人児童生徒等に対する支援計画を統合した参考様式の送付について (通知)」が出され、「児童生徒理解・支援シート (参考様式)」が例示されています。田村・石隈 (2017) は、「子ども参加型チーム援助」の重要性を提唱し、個別のプランを充実させるために石隈・田村式子ども参加型援助シート、個別の指導計画シートなどを開発しています。関係者で情報共有するためのツールである個別の教育支援計画等の個別のプランを核として、多職種連携を推進するために、「目標」「役割」「仕事の進め方」「関わり」の4つの次元の明確化と共有が求められます。

子どもに障害や病気があると、本人抜きで物事を進めていくことが多くあります。「言われたとおりにする子がよい子」という価値観では自己選択・決定の機会を与えることが少なくなり、さらに意思決定能力が育ちにくくなってしまいます。子どもを真ん中に置いた支援を実現していくためには、幼少期から子どもの意思形成、意思表示、意思決定能力を育成していくことが重要です。



～第5回教研推進委員会～

12月7日(木)に第5回教研推進委員会を開催しました。半日教研の総括と来年度の教研活動について協議しましたので、その協議内容について報告します。

1 協議事項(協議内容抜粋)

(1) 半日教研〔11/1(水)〕の総括

- ①日程について
 - ・この日程でよい
- ②時間構成について
 - ・この時間設定でよい
 - ・*余った時間の有効活用(実践交流、情報交換等に充てる)
- ③その他
 - ・小中連携(授業参観することで系統がよくわかるなど)
 - ・来年度の部会編成について



(2) 2024年度以降の市教研の在り方について

- ・推進委員会提案レジュメを基に学校単位で協議・集約し、各校の意見を基に第6回教研推進委員会で最終決定する。

(3) 2024年度市教研(組織・一日・半日)について

下記の「①組織、③半日教研」の日程は予定です。「②一日教研」の日程については、講師の内諾を得ていますので決定です。

- ①組織教研(予定)
 - ・期 日: 4月17日(水)
 - ・会 場: 清水中学校
 - ・内 容: 開会行事、部会研修
- ②一日教研(決定)
 - ・期 日: 8月7日(水) 午前: 全体会 午後: 部会研修
 - ・会 場: 土佐清水市立中央公民館
 - ・講 演: 講師 是永 かな子教授(高知大学教職員大学院)
 - 演題 「調整中」
- ③半日教研(予定)
 - ・期 日: 11月6日(水)
 - ・会 場: 各部会各会場

(4) 市教研・研究協力校提出物について

○教研各部会	提出締切	○研究協力校	提出締切
*決算書	12月27日(水)	*研究集録原稿	1月31日(水)
*総括教研部会報告書	1月26日(金)	*決算書	2月15日(木)
*研究集録原稿	1月31日(水)		

(5) 第6回教研推進委員会

- ・期 日: 2024年 2月13日(火) 16:00～
- ・会 場: 教育センター



第3回教育支援コーディネーター連絡協議会(あすなろネットワーク)

12月18日(月)に第3回教育支援コーディネーター連絡協議会(あすなろネットワーク)を開催しました。講師に高知県スクールカウンセラーの小松宏暢さんをお迎えし、『不登校についての理解と対応～SCの効果的な活用を踏まえて～』と題して、不登校の背景、不登校の回復段階・回復段階に応じた支援、家族支援の視点・ポイント、不登校支援のポイント、SCの活用事例などについて話していただきました。途中事例演習(グループワーク)を取り入れるなど和気藹々とした雰囲気での研修となりました。



〔小松SCの講話〕



〔グループワーク〕



〔グループ別発表〕

= 感想 =

前回に続き、今回も不登校対応についての講話をありがとうございました。小松先生には学校での支援会等でもお世話になっています。家族支援と考えた時に、どうしても困り感に対する助言という部分で考えてしまいますが、まずは家族の思いや希望をよく聞き、助言が負担とならないよう、共感的理解を大切にしていきたいと改めて感じました。また、学校全体で困り感なども共有し、チームでの対応をしていきたいと思えます。

研究協力校の取組(三崎小)

日本の文化を次世代に繋ぐ ～「地域の学校 地域が学校」家・学・社連携餅つき行事～

三崎小学校では、地域の特色を生かし『地域との連携・協働』による自立を目指した児童の育成をテーマに掲げ、田植え(米作り・収穫・餅つき大会)などの体験活動を通して、山・川・海のつながり、地域の人々の暮らしや文化、環境について学び、考える取組を行っています。12月19日(火)には地域の皆様にも参加していただき「全校餅つき大会」が開催されました。参加の皆さま方から餅つきに関わる知識・技術を教わりながら全校児童が力いっぱい杵をふり、つきたての餅を丸め、みんなで会食をしました。



〔岡村前校長の餅つき指導〕



〔ヨイショ!子どもチャレンジ〕



〔美味しい!笑顔いっぱい!〕



皆様おそろいにて、良き新年をお迎えください
2024年がお互いの飛躍の年で
ありますようお祈りいたします

